内容見本

得た結論は奥羽同盟軍は賊軍ではなかったということであった。東北新聞はこれを掲載し終って明治四十三年についに廃社となった。

父は正式には明治二十五年から四十三年まで十八年間、浮沈波瀾の多かった東北新聞社で働いたわけである。病弱なのだが、病気する暇がなかったのかもしれない。明治四十四年多くの読者の希望で『仙台戊辰史』は荒井活版所から単行本として出版された。菊版一〇二一頁の大著であった。行李に一つあった資料は提供者に返したが、父は急いで返すのではなかった、もう一度見たいと思って行った時はもう散佚してなかったと私に語っている。父の『仙台戊辰史』がいつまでも廃らないのは、その資料的価値がかけがえのないものだからである。大仏次郎が『天皇の世紀』を朝日新聞に連載していた当時、毎日のように父の『仙台戊辰史』が引用されているのを見て、孫たちは眼を輝かして喜んだものだが、大仏次郎は『仙台戊辰史』を資料そのものとして引用したのであろう。『仙台戊辰史』が出版されて幾日かたった一夕、父は仙台南町の料亭・陸奥(むつ)の園(その)に大槻如電・文彦兄弟に招待されて、よくやったとお賞めのことばを頂戴し、酒肴の饗応にあずかった。如電翁はまげを結っていたが、自ら三味線をひいて唄を歌った。文彦博士はいつも如電翁の膝下にかしこまっており、文彦と呼ばれるごとにハイと返事をして平伏するのだったという。

『仙台戊辰史』に対する反応は大正九年になって初めて現われた。長州の末松謙澄法学博士編の『防長回天史』である。全十二巻の厖大なものであった。その中の「東北人謬見考」および「東北人謬見考論評答弁」は末松博士が執筆して『仙台戊辰史』を反駁したものであった。柏書房が昭和四十八年に『仙台戊辰史』を復刻した時、同時に『防長回天史』も復刻したのは時宜を得た措置であった。

父は仙台で妻帯し三男五女をもうけたが、二男二女を亡くし、一男三女が残った。その一男は私で三女は私の妹達である。私は明治三十二年、父が三十二の時生まれた。『仙台戊辰史』が出版された明治四十四年は十三歳で中学に

奥羽戊辰戦争と仙台藩

世良修蔵事件顚末

幕末戊辰の大兵乱は、
奥州鎮撫軍参謀・世良修蔵の
密書露見と同時に爆発した。
薩長中心の明治維新史に対して
敗者の立場から鋭く問題を提起し、
禁忌視されてきた世良事件を解明。
「勝てば官軍」史観にきびしく挑発する。

藤原相之助 著

内容見本

緒言

幕末戊辰の奥羽の大兵乱は世良修蔵の密書露現と同時に爆発した。福島の旅舎で捕えられ、阿武隈河畔で斬られた世良の、碧血いまだ乾かざるに二十七藩は結束して薩長討払いを断行するとともに、白河城を堅めた。そしてその結果奥羽越三十余藩は朝敵をもって論ぜられ、明治維新史劈頭に黒点を印したが、そもそも世良と奥羽との関係の真相は如何、世良とはどんな人物か、奥羽人はどんな考えを懐いていたか。私は世良の密書を中心として、その機微の関係を探り出して描写しておきたいと、仙台定住以来始終心がけて来たが、今度この稿を起こす気になったのは、左の動機に依るものである。

〔その一〕 昭和十二年に山口県知事から宮城県知事になって仙台に来た菊山氏は、前任地を去る時、宮城県へ行ったら世良の墓へ詣でて下さいといわれたが、仙台へ来て見て考えた、旧仙台藩と世良との関係上、自分の墓参は宮城県人の感情上どうであろうかと。仙台郷土研究会の阿刀田氏に相談すると、阿刀田氏は、その心配は無用でしょうというので、墓参の約を果したという。また内ヶ崎作三郎氏の談に、先年山口県に行った時、村岡代議士の母堂キチ子刀自に面会した、刀自は世良の実兄十内の長女で大島郡釜野村に健在（昭和十一年に七十九歳）で、叔父修蔵の墓へ明治三十年頃世良徳寿が墓参しただけで、その後は誰も行きませぬが、どうなってるやらと床しそうに話していたという（その後村岡代議士が墓参に来たという）。

意義深い遺稿出版

前柳井市立図書館長　谷林　博

世良密書の存否を真正面から取り上げ、維新史に挑戦したこの遺稿出版はマンネリ化した世良の人物像、ひいては戊辰戦争解明のためにたいへん意義深い。（本書推薦文より）

谷林博氏は唯一の伝記『世良修蔵』の著者です。本書は昭和四十九年刊行。平成十三年に小社より復刻され、五千円、残部僅少です。

マツノ書店

世良が奥州に来て殺されてからすでに七十余年の歳月が流れた。世良の故郷旧長州藩の人々や、世良の身寄りの人々などは、旧仙台藩と世良との関係から、現在の奥州人も感情上幾分釈然たらざるものがありはせぬかと思っているらしいが、今日の奥州人は、世良その人について不快の感情などはもっておらず、むしろそうしたことにははなはだ無関係なようだ。しからば幕末維新当時において奥羽に一大禍乱を捲き起こしたこの事件の因子を、この地方の人は何と見ているか、どう解しているのか。明治九年、奥州刈田郡白石陣場山に世良の墓を作り、墓碑（宮城県が計画し磐前県で建てたが、実は政府が命じて改葬建碑を行わせたものであった）を建てたが、その碑文中に「為賊所殺」という句がある。それをいつか何者かが「為賊」の二字を削り除いている。世良を殺したもの（仙台藩士に福島藩士も加わっている）を賊と呼ぶことに対する無言の抗議なのであろう。

しかし石碑の文字を削ったからとて何の意味をなすものでもない。世良と奥羽諸藩との関係を史実の上から明白にすることによってのみ、認識の誤りないし不足を是正補足し得べきである。そしてそれにはその当時世良が代表した長州藩の方針およびその主張、世良の使命とその立場、世良の人物とその行動、仙台藩の時局に対する態度方針、藩主および重臣の主張行動をも明かにして、さて公平な批判の基礎を見出さなければならず、勤王でなければ佐幕、官軍でなければ賊だというような粗っぽい断定を無理に押しつけて一方的に事を済ました時代の惰力も、その後の歳月の経過とともに次第に失せて、その下からありのままの姿で現われて来ている純正史実を仔細に検討すべき時代になって来ている。無論その当時の行懸りも感情も、七十余年の星霜の流れにスッカリ洗い去られているのだから、客観的に明瞭な史実を基礎とした、公正な史的認識を立定すべき場合だろうと思う。

しかるにこの地方人は、地方史としても、郷土の研究としても、とかく戊辰事変のことには今もって触れたがらないようだ。むしろ回避しているかにさえ見える。菊山さんや内ヶ崎さんの話を新聞で見るにつけ、私はこれを遺憾に

『奥羽戊辰戦争と仙台藩』

萩市特別学芸員　一坂太郎

明治維新、とりわけ戊辰戦争は日本国内に多くの禍根を遺した。勝者となった長州（山口県）に対し面白からぬ感情を抱いているのは、敗者となった会津（福島県）だと言われている。長州対会津。いまだマスコミの興味も、このあたりに注がれる。

しかし長州などの新政権が、戦争回避に動いたとされる仙台藩にどのように接したかという問題もまた、大きいと思う。そのことは長州ではもちろん、仙台でも忘れられがちではないか。現在の宮城県仙台市は東北地方の政治経済の中枢で、人口百万を越える大都市だ。いまさら感情的になり、過去の歴史にこだわる必要は無いのかもしれない。

仙台藩伊達家、六十二万五千石は東北きっての外様大名である。幕末動乱の中では、ほぼ中立的立場だった。それが戊辰戦争のさい、奥羽和平と会津藩救済を願い、奔走する。ところが「官軍」は、せせら笑うかのごとく仙台藩や米沢藩の思いを踏みにじり、会津藩の嘆願を一蹴して戦争に持ち込もうとする。少なくとも、仙台藩はそのように感じた。

せせら笑い、踏みにじるのは誰か。それは「官軍」の威光を笠に着た、長州藩の世良修蔵だということになる。こうして、堪忍袋の緒が切れた仙台藩士による世良暗殺事件が起こった。それを機に奥羽の二十五藩は仙台・米沢藩を中心に同盟を結び、後日、越後の六藩も加わった。そして進攻してきた「官軍」との間に、激しい戦いの火ぶたが切って落とされたのである。これは、会津藩も予測しなかった展開だったようだ。

世良暗殺の引き金が引かれたのは、世良の密書（同じ「官軍」参謀の大山綱良あて）が発覚したからだという。密書には「奥羽皆敵と見て逆撃之大策に致したく候」などとあり、仙台藩を激昂させたのだ。だとすればこの密書は、大きなポイントになってくる。

仙台藩側から見た、藤原相之助『仙台戊辰史』が出版されたのは明治四十四年。これに対する反論を掲げた末松謙澄『防長回天史』十巻は、大正八年に出版された。反論では密書は偽書とする。あるいは頭注で、何度も『仙台戊辰戦史』が誤りだと指摘した上、付録の計百四十四頁にもおよぶ「東北人謬見考」「東北人謬見考論評答弁」でも、非難を繰り返す。

藤原のさらなる反論が、このたびマツノ書店から復刻される『奥羽戊辰戦争と仙台藩』である。副題は「世良修蔵事件顛末」とある。昭和十四年脱稿だが、諸事情から出版されたのは同五十六年だ。

巻末部分で藤原は、「これを要するに現存の史料として世良の密書の原本と称するものの真偽が判明しないからといって、その史実を否定しようとすることは、史料の鑑査と史実の考察を混同させるものである」と述べる。相手の論の一部を切り取り、水掛け論に引きずり込み、全体を否定しようとする手法で攻撃されたことをうかがわせる。

あるいは巻頭では、「攻撃やら、嫌がらせやら、いずれも私の旧著を目がけて筆鋒を攢（あつ）め、仙台の郷土史家が云々と、恰も仙台藩の代弁者でも相手取るかのような口吻で、一学徒に過ぎない私の業績に難癖をつけている」と述べているから、よほど腹に据えかねることがあったらしい。藤原は「仙台藩の代弁者」と思われるのが、心外だったという点も注目したい。彼には郷土愛やお国自慢で叙述していないという自負があったのだ。だから世良に対する奥羽諸藩側の悪評も、「多少割引して考えなければならない」など、冷静な姿勢を保とうとしている。

これらの史書を並べてみると、密書の真偽、戦争回避の有無といった重要な問題が、十分解決していないことに気づく。それは長州だ、仙台だ、といった郷土史の範囲にとどまらず、「明治維新」の本質にかかわる問題である。四年前に『仙台戊辰史』を復刻したマツノ書店が、このたび『防長回天史』と『奥羽戊辰戦争と仙台藩』を同時に復刻し、新しい読者の前に提示するという。「明治維新」を風化させないためにも、その意義は大きいと言えよう。

世良修蔵の擁護者としての藤原相之助

國學院大學法科大學院法務研究科在籍　戦史研究家　長南政義

名著『仙台戊辰史』で名高い藤原相之助が、本書を執筆する動機の一つになったのが、『近世日本国民史』の著者でジャーナリストとして令名の高い徳富蘇峰の来訪であった。自身も東北新聞社の政治記者として活躍し「西に福本日南あり、東に藤原非想あり」と称された藤原相之助と徳富蘇峰という操觚界の二大巨人の会見中、徳富より、「『仙台戊辰史』につき懇切な御話があったので、私はいよいよ旧著に対する責任を痛感する気持ちに」なったと、藤原は述べている。つまり、『仙台戊辰史』の誤りを訂正することが本書執筆の動機を形成する要因となったのである。

もう一つの動機として指摘できるのは、末松謙澄が偽書とした所謂「世良の密書」の真贋性の問題である。世良修蔵が大山格之助に宛てた密書は、世良処刑の決定的理由となり、延いては奥羽戊辰戦争の導火線となった重要文書であるにも拘らず、写しのみしか存在せず文書原本が未発見のままであるため、密書偽物説が主張されるようになった。藤原は、本書に於いて、当時の政治状況と密書関係書類とが吻合するか否かを検証する手法を通じて、「密書」の信憑性を証明しようと努めており、それが本書に推理小説を読むかのような面白さを附与している。

しかし、本書最大の動機は、別の所にある。それは、勤皇か佐幕か、官軍か賊軍かというイデオロギー性や怨讐を超えて、明覈かつ確実な史実を基礎として、世良修蔵殺害事件の真相と世良修蔵の人間性を明らかにすることで、この両者に対する東北人の公正な史的認識を確立することである。そして、本書を通徹している公正な史観を証明するように、奥羽諸藩の記録に見られる「暴慢無礼、酒食に荒み、財貨を貪ぼり、士人の風上にもおけぬ」という世良修蔵に対するイメージを、藤原相之助は「昔風で諸事物堅い奥州武士の見た感想」であるから「割引」いて考える必要があるとして、世良修蔵を擁護している。つまり、世良修蔵を非難する理由として指摘される、紅灯緑酒の巷に出入りし、酔えば美人の膝に枕し、夢に天下の権を握るという、「志士の気風」は、「克己復礼」を武士の本分とする「奥羽士人」の価値観から見た場合に異質で擯斥すべきものとして映ったにすぎず、酒食に荒むという世良修蔵像はそれを評価すべき人間の価値観の差に過ぎないというわけである。

藤原相之助の息子である藤原勉は、「父は世良修蔵の理解者をもって任じて」おり、「世良事件が起らなくても戊辰戦争は避けられなかった、と考えていたようである」と回想しているが、本書を一読すれば、本書の底流を成している「官軍か賊軍か」というイデオロギーとは無関係の公平な史観を読み取れるであろう。

末松謙澄が『防長回天史』を執筆した動機の一つに、『仙台戊辰史』への反駁があるとされている。今回、マツノ書店が、『仙台戊辰史』を補うものとして執筆された本書を『防長回天史』と同時復刻するのは時宜を得た措置であり、この機会に是非、『防長回天史』と本書との併読をお薦めしたい。

目次

緒言　戊辰戦争をめぐる時代の動き
この書の成りし次第　藤原勉

第一章　幕末の政局と仙台藩
1 薩長とその代表の行動
2 公議思想の来由と仙台藩……伊達慶邦の建白
3 建白問題の顛末
4 薩長の勢炎と京都の空気
5 旧幕府と仙台藩の関係……対薩長の情勢
6 薩長代表と仙台藩

第二章　仙台藩の行動と世良修蔵
1 一面進撃、一面勧降
2 荘内征伐も始まる
3 世良の行動と参謀局
4 会津藩説得とジャーナリズム
5 贋公卿と金の問題
6 世良の人物とその行動……戸田主水の弾劾状

第三章　事件前夜―世良の活躍
1 勧降と降伏願の経緯
2 降伏問題と転陣関係
3 同盟嘆願の準備
4 嘆願書の提出と届書
5 降伏に対する総督府側の意見
6 列藩の計画、九條総督の憂慮
7 世良の憤怒、嘆願の却下

第四章　破局
1 破局回避の運動
2 世良に対する憎悪と討払準備
3 世良醍醐の協議
4 密書の露現から斬殺まで
5 首級の始末と瀬上の行動
6 薩長人討払いの実行

第五章　事件の結末
1 醍醐少将の驚愕
2 密書の意義とその影響
3 奥羽越同盟とその結果
4 世良関係雑話

第六章　世良事件の影響
1 世良霊神碑と賞典
2 刑罰と報復
3 按察使府と渡辺判官
4 世良の改葬とその建費
5 報復回避と密書の問題
6 世良弔祭の続出

■体　裁　二七〇頁　A5判並製・箱無
■定　価　五千円(税・〒込)
■予約特価　四千円(税・〒込)
■特価締切　本年六月末
■発　売　平成二十一年九月上旬
▼書店不卸　▼分割払可　▼返本OK
山口県周南市銀座2～13
☎〇八三四㉑二九五　マツノ書店